

## 子どもたちの不登校に思う

不登校の子どもはこの10年ほど増加の一方で、2023年度は約30万人と過去最多となりました。文科省が定義する不登校は「年間の欠席日数が30日以上」であり、実際は毎日午後から登校する子、登校しても毎日保健室や相談室で過ごす子、学校に挨拶だけして帰る子どもも多く、そういう子は出席扱いになるため不登校にはカウントされません。つまり、学校生活に適応できず苦しんでいる子はこの何倍もいると推定され、およそ数十万以上に及ぶ子どもたちがメンタルケアを必要としていると考えられます。しかし、初期のうちから専門機関へ相談しているケースは一部に過ぎません。診療の場では、初診時にはすでに長期間の不登校、重度の体調不良、引きこもりに至っている子を数多く経験します。

相談窓口そのものはあるのですが、どこも手一杯になっています。学校では一部のとても手のかかる子、病院では一部の重症の子、行政でも虐待や一部の大変な家庭にエネルギーの大半をもっていかれ、支援を必要とする多くの子どもたちのケアができていないのが現状です。小児科の日常診療で感じるのは、子どもがサインを出し始めている初期のうちに私たち大人がしっかり受け止め、適切な介入を行ってれば、ここまで大きな問題にならずに済んだのではないかと感じます。

このような現状をみていると、必ずしも専門家でなくても、不登校になりかけている子をきちんとフォローできるくらいの人材が地域が増えてくれば、早期からの介入が可能となり、子どもたちは問題をこじらせることなくもっと早く元気になれるのではないかと感じます。そのためにも、時間はかかるかもしれませんが、子どもたちの日常生活にかかわる様々な職種の方々に、子どもの心や体について、さらには不登校の子にしばしばみられる発達障害についての正しい知識を習得し、理解を深めていただく機会を作っていくことが重要ではないかと私は思います。さらに、多職種間で緊密に連携することにより、子どもたちに起きている問題を大人たちがいち早く認識して協議・対応へとつなげていくネットワークを作ることも、リソースの少ない当地域では非常に有用と考えます。

子どもたちの心の健康は、まさに危機的状態です。子どもには、社会に対して発信する力はありません。子どもたちを守り育てていくのは大人の責任です。これからの日本を担っていく子どもたちの心を救うことは、世の中において最優先の仕事と言ってもいいのではないのでしょうか。しかし医療者だけでは、このような社会全体の問題を解決していくことは困難です。実際に、学校や社会の中で悩み、苦しみ、病んでしまって子どもたちを、医療だけで治していくことは不可能です。子どもたちの悩みや苦しみの多くが学校や社会の中にあるのなら、病んでしまった子どもたちについても、社会全体で一緒に考え、支え、治していかなければならないと私は考えています。